

幼児期におけるふさわしい園生活展開のカリキュラム装置 —ストラテジー・パラダイム—

田 中 亨 胤

カリキュラムは、子どもたちの育ちを確かなものにしていく教育・保育の装置であり、「幼児期にふさわしい園生活」を基礎づける多重構造からなっている装置である。装置には、「治療・予防・増進スタンス」、「育ちのアカウンタビリティ諸相」、そして「ふさわしい生活位相」の3つの基本フィルターが組み込まれている。これらのフィルターを通過する園生活の展開が、幼稚園・保育所における教育・保育である。

キーワード：カリキュラム装置、治療・予防・増進スタンス、育ちのアカウンタビリティ、ふさわしい生活位相、カリキュラム開発

I 問題の所在

「発達観」「子ども観」「教育・保育観」が三位一体となってカリキュラムが構成される。カリキュラムは不動のものでもなく、固定化されるものでもない。カリキュラムは、現実には、社会変化に対応しながら、多様化し、個性化する。カリキュラムが商品化されたり、私物化されたりすることもある。カリキュラムの揺らぎの中で、カリキュラム視座の不透明性が見え隠れする。

幼稚園や保育所における教育・保育のカリキュラムは、「教育課程」「保育課程」として改訂されるとしても、そのカリキュラム基盤には公的性格を潜在させている。この視座を基本にして、カリキュラムの開発が進められる。カリキュラム開発は、必ずしも奇を衒うことから取り組まれるものではない。

カリキュラムの開発においては、教育・保育としてのアカウンタビリティを担保する視点が

想定される。田中がこれまでに取り組んでいる一連のカリキュラム開発では、上記のようなスタンスを間違いなく想定して、取り組んできたところである。⁽¹⁾ しかし、カリキュラムの開発には、継続的なPDCAサイクルによって、マクロとミクロとの幅のある多角的な視点から、検証が進められていくことが求められる。この検証システムの試みとして、本稿の研究課題「幼児期にふさわしい園生活展開のカリキュラム装置—ストラテジー・パラダイム—」を設定した。

II 研究の目的および方法

(1) 研究の目的

「ふさわしい生活」を視座とするカリキュラム開発にかかわる研究として本研究がある。カリキュラムは「ふさわしい園生活展開」における教育・保育装置である。この装置を通過して、子どもたちの育ちがある。幼児期に「たがやす」「つちかう」「はぐくむ」ことを具体化する装置である。

そこで、本稿では、装置の構造モデルを提示し、組み込まれるカリキュラム・フィルターの提示とその構成要因について明らかにする。カリキュラム装置は、教育のアカウンタビリティを担保するための機能を発揮し、実践を方向づけるからである。

(2) 研究の方法

○基礎資料：「ふさわしい生活」のカリキュラム開発にかかわる研究協力幼稚園（保育所を含む）における「園要覧」「長期・中期・短期の指導計画」「教育・保育資源」「カンファランス記録」「半構造化観察記録」「フィールドノート」などを基礎資料としている。

○研究協力幼稚園（保育所）：直接的・間接的に多数の幼稚園・保育所⁽²⁾の協力を得たが、一覧については省略する。

○研究期間：「ふさわしい生活」にかかわる研究協力幼稚園におけるフィールドワークは、それぞれに長短がある。古くは、1983年（若桜幼稚園）から開始した。

Ⅲ カリキュラム装置の構造モデル

本稿におけるカリキュラム装置は、次のようなフィルターとその構成要因から想定される構造モデルである。インカム装置としての「子どもの現実」（第1構造）、基本装置としての「カリキュラム・フィルター」（第2構造）、そしてアウトカム装置としての「子どもの育ち」（第3構造）をもって装置モデルが構成される。

第1構造としての「子どもの現実」は、子どもの生活背景や発達状態などの実際である。「よい」「わるい」の評価ではなく、ありのままの子どもたちの実際の姿をどのように把握するかによって、基本装置のカリキュラム・フィルターの操作が異なる。

第2構造としての「カリキュラム・フィルター」は、3つのカリキュラム・フィルターが想定されて組み込まれる装置である。第1のフィルターは、「治療・予防・増進」のスタンスである。第2のフィルターは、子どもの「育ちのアカウンタビリティ諸相」をどのように想定するのか、その想定装置である。第3のフィルターは、「ふさわしい生活位相」である。長期の園生活の中で生活を成熟させていく過程として想定されるものである。

第3構造としての「子どもの育ち」は、未来への投資として想定される子どもたちの育ちの姿である。教育・保育カリキュラムの効果や成果である。

Ⅳ 第一のフィルタリング層：3つのスタンス

複合的なスタンスが想定される。3つのスタンスは、次のようなカリキュラム推進とそれに基づく構成である。⁽³⁾

1. 治療的ストラテジー

医療では「治療」に相当する。「足らざるを補う」とする教育の構えである。欠如している育ちの側面を把握し、補完していこうとする視点から教育課題が想定される。しかし、このスタンスでは、いたずらに、そして思いこみとして、子どもの「負の姿」に特化して教育課題を強調することに傾きやすい。

2. 予防的ストラテジー

医療では「予防医療」に相当する。長期的展望に立った生涯発達の観点から、子ども期に「育つもの」「育てるもの」などを教育課題とする。生涯の発達ステージは相互に関連し合うこととして受けとめ、子ども期における教育課題を想定する。幼児期にのみに特化した教育課題の構

成にとどまるものではない。

3. 増進的・促進的ストラテジー

医療では「増進医療」に相当する。子どもの一人ひとりの「持ち味」「特色」「個性」「良さ」などをさらに促進・増進・伸長させていく視点から教育課題を想定する。画一的、平均的な育ちを求める教育課題ではない。

V 第二のフィルタリング層：育ちのアカウンタビリティ諸相

生涯発達から受けとめた視座、「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」から受けとめた視座、これら2つの視座を基軸にした「育ち」は、次の4点からの生活展開として想定することができる。⁽⁴⁾

1. 知性

①360度の好奇心

子どもは、選択的にまわりの環境に好奇心を向けるわけではない。いわば、360度の射程から好奇心を様々な環境に向けていく。環境は、人、物、事であたりする。好奇心は、素朴な不思議と向き合う生活を仕掛けていく。「疑問」「関心」から思わず知らずに「見る」「聞く」「考える」「調べる」「探す」「試みる」「工夫する」などの自発活動を生み出していく。

②好奇心から芽生える知性

子どもの学びは、自発活動を生み出す好奇心から成り立っている。好奇心が活動の動機付けとなって、自ら学ぼうとする気持ちや姿が具体化していく。この学びの過程で、子どもには生きた知性が培われていく。

③応答的環境

好奇心を向ける環境が応答的な環境であると、子どもはその環境に魅了されて、意欲的にかかわり続けようとする。「不思議がわかりた

い」と思い、「新たな不思議」に様々な知性的な接近を試みようとする。応答的な環境にかかわることの楽しさや喜びを体感していくことになる。

2. 感性

①気持ちにふれる生活

子ども期における様々な感情体験が、心の豊かさを育む。「美しいもの」「善いもの」「真実なもの」にふれる生活には「感動」がある。この感動をはじめとして、「もどかしさ」「喜び」「悲しさ」「楽しさ」「悔しさ」などの感情が生活の中で体験されていく。

②価値にふれる生活

1つの価値尺度では、まわりの「人」「物」「事」の存在の素晴らしさを実感することには限界がある。思いこみとしての感じ方や見方に拘泥して、閉鎖回路的な価値感覚にとどまってしまう。価値のモノトーンは、子ども期に様々な価値体験の生活を培うことによって克服されていく。

3. 野性

①環境に挑む

「覇気や生気がない」といわれる。子ども期は、「快活さ」「元気さ」「明るさ」「躍動感」「驚き」「ときめき」「緊張感」「手応え感」など表情が、まわりの状況や雰囲気などの環境にかかわってこうとする姿勢をつくっていく。園では、このような思いや表情をくすぐる環境が配慮される。

②自分に挑む

野外の自然環境にふれる生活は、時に厳しく、時に感動的である。そして自分が試され、自信を持っていくこともある。環境にはふざけてかかると危険もある。真剣に、本気でかかると、環境は自分にとってかけがえのないものとなっていく。ささやかではあるが、自分自身が大きくなっていくことを実感していく。

4. 人間性

①群れる生活

「群れる」ことには、育ち合う基盤がある。「ヒト」から「人」へ、そして「人」から「人間」へと歩むことが予定される生活には、「群れる」環境が不可欠となる。育ち合う土壌である。

②マイナス環境としての関係性剥奪

互いが関係を持ちながら生活すると、人間としての基本的な「生きる力」を身につけることになる。「サル」の隔離飼育実験」の研究では、次のような「関係力」の育ちが見られないとの結果がある。⁽⁵⁾「仲間づくり」「異性愛」「かわり合いの遊び」「世話」「育児」などである。関係性が剥奪される環境では、まわりの存在とのチャンネルが構築されにくい状況がある。隔離飼育のサルは、「孤立」「無視」「攻撃性」を最後の手段としている。

③モデリングとインプリンティング

まわりの人たちとの緩やかな関係を持ちながら、その人たちのふるまいを自分なりに取り入れていく。モデリングやインプリンティングの研究からの知見である。互いの関係性をつくっていくには、「コミュニケーションの生成」がどのように展開されるのが鍵となる。コミュニケーションの生成は、「言葉を交わす」「気持ちを通じ合う、分かり合う」「互いを認め合う、変わり合う、育ち合う」などの生活の質をととのえていく過程である。

5. 健性

①揺らぐ食生活

「生活習慣病」は、成人のみならず、子どもたちにおいても生涯健康の面から課題となっている。「食育基本法」(平成17年)が制定され、家庭生活、学校園、地域社会において重要な生活環境課題として認識されているところである。「生活習慣病」は、日常の食生活とは無関

係ではない。揺らぐ食生活の現実がある。

②環境ホルモン汚染の生活環境

見えにくい環境である「環境ホルモン」(内分泌攪乱化学物質)が、生涯健康を揺るがす要因の1つであるとされている。「環境ホルモン」は、食品、建材、大気をはじめ、玩具、食器などにおいても話題となっている。

③ストレスの生活環境

慌ただしい生活、ぎくしゃくした生活、単調な生活などは、ストレスの引き金になっている。過度のストレスがかかると、大人も子どもも「不安定」になりやす状況がつくられていく。ゆったりとした環境は、ストレスを軽減化していく。

Ⅵ 第三のフィルタリング層：ふさわしい生活位相

1. ふさわしい生活の概念生成

「ふさわしい生活」の概念は、平成元年の「幼稚園教育要領」において、明確に示された。その後に改訂された、平成10年の「幼稚園教育要領」、そして平成20年の「幼稚園教育要領」においても、同様に「ふさわしい生活」が明示され、不動の視座として位置づけられている。「ふさわしい生活」の概念は、幼稚園のみならず保育所における保育の展開にあっても不動の視座である。

「ふさわしい生活」にかかわる取り組みは、「幼稚園教育要領」の改訂を見通して、幼稚園において事例的に進められた。しかし、その概念は必ずしも構造化・体系化されているものではなかった。幼稚園における経験則に照らして、それぞれの幼稚園におけるカリキュラムに仮説的概念が想定されていった。幼稚園のカリキュラムを通覧し、「ふさわしい生活」の概念としてのキーワードを析出することによって、「ふさ

わしい生活」の概念を構造化・体系化して把握することが進められた。その結果を概念および構成要因のツリーとして示すと、次のようになる。⁽⁶⁾「ふさわしい生活」の多面性と複合性を示すものとなっている。

- ①ともに歩む・生きる生活：「群れる生活」「他者の存在に気づく生活」「持ち味やよさを認め合う生活」「共感したり寄り添う生活」
- ②考えて歩む・生きる生活：「必要感から生み出される生活」「気持ちよく生活するために必要な習慣や態度を身につける生活」「問題解決的な体験的生活」
- ③自分づくりの生活：「さまざまな感情を体感する生活」「さまざまな価値を体感する生活」「みずからがつくる生活」「自分らしさを出す生活」「自分を調整する生活」
- ④安定感をもって歩む・生きる生活：「夢中になる生活」「応答的な環境にふれる生活」「自発的・意欲的な生活」「充足感・手応え感・有能感のある生活」「探求的・知性的な生活」

「冒険するところをもった生活」「創造の喜びをもつ生活」「有用感のある生活」「居場所のある生活」

- ⑤地域の環境にふれる生活：「地域のすばらしさにふれる生活」「地域の生活にふれる生活」

2. ふさわしい生活位相モデル

研究協力の幼稚園におけるカリキュラム開発資料を通覧し、その大枠から把握される「ふさわしい生活」に組み込まれている概念および構成要因を時間軸の点から構造化・体系化するとすると、表1に示すような生活位相としてカリキュラムには想定される。⁽⁷⁾

幼稚園入園初期においては「安定した生活相」に重点に置き、その後、長期にわたって「自発的生活相」「意欲的生活相」「自主的生活相」へと園生活の質を高めていき、幼稚園修了までには「主体的生活相」へと、シフト変換されていく生活の位相が把握される。それぞれの生活相の受けとめは、「ふさわしい生活の側面」と「育つもの」に示す諸点がみられる。

表1：生活相にあった「ふさわしい生活の側面と育つもの」

	ふさわしい生活の側面	育つもの
① 安定した 生活相	・ただ一人の存在として受け入れてくれる大人との生活 ・気持ちのよりどころとなる居場所のある生活 ・物語やイメージの世界に存分にひたれる生活	・自尊感情・他者との信頼感 ・安定した心情 ・想像力
② 自発的 生活相	・興味関心の中に見つけられる生活 ・直接的、具体的体験が得られる生活 ・感動や思いを共有する友達との生活	・充実感・満足感 ・本物との出会いの喜び ・共有する喜び
③ 意欲的 生活相	・自由な発想やイメージを実現できる生活 ・自分のよさを発揮し認められる生活 ・思いっきり身体を動かす生活	・自己表現の楽しさ・創り出す喜び ・自己実現の承認・生活実感 ・身体を動かす喜びと尊さ
④ 自主的 生活相	・自分なりの課題に取り組む生活 ・思いを循環させながら営む生活 ・体験により知識や技能を獲得する生活	・達成感、次への意欲 ・思いを豊かに、確かに表現する力 ・知識技能を獲得する喜び
⑤ 主体的 生活相	・自由にならない自然の生き物と付き合う生活 ・乗り越えられそうな困難に立ち向かう生活 ・違う価値感をもった友達と（主張やぶつかり拒否葛藤をへて）認め合う生活	・自然観（矛盾の肯定） ・失敗にくじけない意欲 ・他者も大切にする態度 ・様々な感情
①～⑤ 全生活相に かかわる	・手に負える自然の生き物と付き合う生活 ・夢中で取り組む友達から学ぶ生活 ・大人の技能や技に触れたり、生活を共にしたりして、文化や生活の仕方を身につける生活 ・美しいもの、尊いもの、あたたかいもの、にふれる生活	・自然観（喜び・感謝） ・真似る喜び ・人のあたたかさに触れる喜び ・地域の文化・生活力・循環する意識 ・より豊かな価値観

なお、それぞれの「生活相」は、三年間の幼稚園生活として次のような概念としてカリキュラムに位置づけることができる。⁽⁸⁾

- ①自己中心の安定した生活相：保育者に誘われてまわりの環境にかかわってみたり、傍観したりして、自分なりに思いをもってまわりに関心を寄せる生活
- ②自発的生活相：思い思いに遊んだり、自分で遊びを見つたりする生活
- ③意欲的生活相：好きな遊びを見つけて遊んだり、不思議に気づきながら、まわりの環境にかかわってみようとする生活
- ④自主的生活相：いろいろなことに自分や友だちと誘いながら取り組んだり、遊んだりして進める生活
- ⑤主体的生活相：めあてをもって遊んだり、必要感をもってまわりの環境にかかわったりしてつくる自分たちの生活

VII 課 題

本稿におけるカリキュラム装置論は、仮説モデルの域にとどまるものである。しかし、幼稚園や保育所と少なからず信頼関係を構築しながら継続的に進めてきたカリキュラム開発の一環としての研究成果であると考えている。装置に組み込んだ3つのフィルターは、研究協力の幼稚園や保育所における実践の中で、そして保育者の経験則によって、構成されたものである。数量化の結果をエビデンスとする研究ではないが、経験則に裏づけられた手応えのある装置モデルを提示することができた。なお、今後も、カリキュラム装置の信頼度を確かなものにするために、組み込まれるフィルター構造の検討をはかることとする。

<注・引用・参考文献>

- (1) 田中亨胤「幼児教育カリキュラム開発におけるフィールドワーク綴り―実践園からの学びの位相―」兵庫教育大学学校教育研究会『教育研究論叢』（第8号）、2007年、PP. 23～51
- (2) 田中亨胤「同上論文」兵庫教育大学学校教育研究会『教育研究論叢』（第8号）、2007年、PP. 23～51
- (3) 田中亨胤『幼児教育カリキュラムの研究』日本教育研究センター、1994年、PP. 210～212
- (4) 田中亨胤「子ども期にたがやす・つちかう・はぐくむ」『思いやりのある子どもを育てる』（幼児教育読本第17集）、大阪市教育振興公社・大阪市幼児教育センター、2000年、PP. 57～70
- (5) 大阪大学グループをはじめとした、サルの観察研究を通覧し、行動傾向を要約し、把握したものである。
- (6) 佐藤哲也・井上琴子・田中亨胤「幼児の『ふさわしい生活』を支える保育の研究」兵庫教育大学『兵庫教育大学研究紀要』（第18巻・第1分冊）、①1998年、PP. 147～159
- (7) 田中亨胤「幼児期に『ふさわしい生活』のカリキュラム」大塚中剛『幼年期教育の理論と実際』北大路書房、1998年、PP. 76～89。なお、「ふさわしい生活」の概念および構成要因のツリーの作成には、田中らの研究グループによる次のような研究成果をふまえている。：野村恵子・田中亨胤「保育実践における記録と評価の開発に関する事例的考察」兵庫教育大学幼児教育講座『幼年児童教育研究』（第7号）、1995年／姫路市立網干幼稚園『友だちと遊びを創りだし自信を持って生活する幼児の育成―幼稚園・家庭・地域との連続的な生活を通して―』（平成8年度姫路市立幼稚園自主研究会）、1996年／田中亨胤「幼児期に『ふさわしい生活』のカリキュラム―人間関係の状況づくりを事例として―」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（第44巻・第一部）、1998年
- (8) 田中亨胤「幼稚園における階段カリキュラムの開発―若桜幼稚園の取り組みを事例として―」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（第46巻・第一部）、2000年、PP. 632～637